

【研究ノート】

戯曲
A T Mからの脱出

増 田 辰 良

研究ノート

戯曲 ATMからの脱出

増田辰良

NA ある英字新聞 (Asahi Weekly August 6, 2017) に次の記事が載

っていました。アメリカのテキサス州オースティンでATM(現金自動出入機)を修理していた作業員が機械の内部に閉じ込められるハプニングがあった。お金を出し入れしに来るお客様に助けを求め続けましたが、ジョークだと思われ、真面目に取り合ってもらえませんでした。そのため作業員は3時間ほど閉じ込められていたそうです。なお記事の長さは100字ほどで、作業員の氏名、誰が警察へ通報したのかは書かれていません。

これから展開します演劇は、この記事にヒントを得て創作したものです。さて、この作業員を救ったのは誰でしょうか?

登場人物

安倍一郎^{あべいちろう}

作業員。一身太助株式会社^{いっしんたすけ}の修理部に勤務する。結婚し、幼い娘が2人いる。36歳。

アナお姉さん。

独身。ATMのテープの声。作業員とのみ会話ができる。30歳くらい。

客1(女性) 独身。

25歳くらい。

客2(母親と娘)。

32歳と5歳くらい。

客3(女性) 独身。

28歳くらい。

客4(お爺さん)。85歳くらい。

客5 加地^{かじ}あかり。陽気な性格。大学生の息子が2人いる。55歳

くらい。

客6 鳥羽^{とば}キン子。独居老人。孫が大好き。80歳くらい。

松本^{まつもと}高志。警察官。独身。32歳くらい。

舞台

小さなスーパーマーケットの入口。右側の奥に駐車場があるが、舞台からは見えない。店の入り口の左端に一台の無人ATM(個室)が併設されている。客席からはその内部が見える。アナお姉さんはATMの裏に座っている。顔は出さない。演者はすべて舞台の右側から入って来る。

第1話

工具の入ったバッグを肩にかけた作業員が舞台へ入ってくる。ATM本体の横にあるドアの鍵を開けて入る仕草。ボタンとドアの閉まる

キーワード…戯曲、ATM、オレオレ詐欺、悲・喜劇

音。これ以降、ATMの内部に立っている。

安倍——さてと。(キヨロキヨロと装置の各部やスイッチを手で触る仕草) どこが具合が悪いのかな? どこだ。

アナ——おはようございます。ご苦労様です。お世話になります。

安倍——おっ。誰だ!?

アナ——すみません。驚かせたりして。わたし、ATMのアナウンス嬢です。

安倍——ええっ? いつの間にテープを吹き替えたのかな。誰もいなくてもしゃべる? 自動でしゃべる機械、で、Automated Teller Machine、ATMってか。はっはっは。われながら上手いシャレだな。今日は冴えてるぞー。うん。

アナ——いきなりダジャレですか。面白い方ですね。はい、テープのわたしがしゃべっています。このお芝居、わたしは準主役的な立場ですのしゃべらせていただきます。よろしく。

安倍——はあ。そういう事情がありますか。分かりましたあ。こちらこそ、よろしく。

アナ——初めてお目にかかる作業員の方ですよ。

安倍——はい。この現場は初めてです。わたし、一身太助株式会社の社員で安倍一郎あべいちろうっています。怪しい者じゃありません。(首に掛けたネームプレートを右手で掴み) ここに身分証明書をぶら提げますから。

アナ——そうですか。残念ですが、見ることができない設定になっています。

安倍——ああ、そうでしたね。アナお姉さんはテープの役ですねえ。アナ——はい。お姉さんだなんて。ようこそわたしの部屋へ。ふっふ

っふっ。頑丈なドアの鍵を開けて入ってこられたので、確かに信用のおける方なのでしょう。ねえ、安倍さん。

安倍——はいはい。直したら、すぐに出来ますから。で、どこが調子悪いですかね? 外から見る限り、不具合は見当たりませんが……。

アナ——はい。配電盤のどこかだと思います。このところ胸が苦しくて。不整脈かしら。

安倍——はっはあ。配電盤はアナお姉さんのハートにあたりますかあ。できれば聴診器を当ててみたいです。はっはっは。

アナ——(笑) まあ、変なこと言っ。ときどき利用案内の表示が消えたり、点いたりして。出し入れする金額表示も薄くなって。お客様から見難みづかいって怒鳴られて、本社へクレームの電話を入れられてしまってますね。もう、大変だったのですよ。

安倍——そりゃあ怒りますよ。大切なお金の出し入れですから、間違いがあるとねえ。(しゃがんでバッグから工具を取り出し) 配電盤、配電盤と。(立ち上がり盤の蓋を開け、覗き込んで) はっはあ。一枚の電子板が黒くなってますね。原因は過熱、オーバーヒートです。ストレスの掛かり過ぎかな? こりゃあもう寿命だあ。取り替えないと、これでは間違った処理をしそうだあ。クレームを言ってくれてよかったですよ。

アナ——お客様は神様ってことですね。

安倍——はい。すぐ、取り替えます。(しゃがんでバッグを開け、電子板を探す)

アナ——もう8年近く、使ってますから。

安倍——ええーっ。8年ですかあ。よく耐もちましたねえ。利用客の多い機械だと念には念を入れて、2年ごとに交換してますけど。

アナ― ここへはそれほど多くのお客様は来ませんから。

安倍― 1日当たり、どれくらい？

アナ― そうですねえ。多い日で40人くらいかな？

安倍― その程度の数ですかあ。

アナ― ところで、安倍さん。景気はどうですか？

安倍― 景気ですかあ。(なぜか、関西弁で) ポチポチでんなあ。

アナ― そりゃあよかった。

安倍― (バッグの隅をキョロキョロと覗き) おう。あったあった。電
子板一枚持つて来ていましたよ。これがないと営業所まで取りに帰
らなきゃならないところでした。作業が一時間遅れるところだった
です。よかったー。

アナ― 何とか、スーパ―の開店時刻には間に合いそうですか？ 開
店後に来られるお客様が多いので。

安倍― はーい。これさえ取り替えればいいのですね、楽勝です。任せ
てください。(ドライバ―で作業をする仕草)

アナ― つかぬことをお訊きしますが、安倍さんは結婚されてます
か？

安倍― はい。しますよ。結婚して、子ども2人います。どう
かしましたかあ。アナお姉さん。

アナ― 羨ましいです。奥様が。お幸せなのですよ？

安倍― 女房ですか。どうですかねえ。わたしはこれといって不
満はないですけどね。ときどき口喧嘩もしますけど。

アナ― 仲がいいほど喧嘩する。

安倍― はい。ああ、そっかあ。もしかしてアナお姉さんは独身なん
ですね。

アナ― はい。ここにいれば一方的な出会いは無数にあるのですが、

そこから発展のしようがありません。お金の円はたくさんあっても
……。

安倍― 運命の男と巡り会う縁がないと。はっはっは。なるほど。

男はたくさんここに来ますもんねー。目移りするでしょ。気になる
男に何か声をかけてみればいいでしょう。この時代、女性も積極的
にならないと、良縁を掴めないですよ。

アナ― そう思うときもあります。でも業務内容以外のことはしや
べれませんか。

安倍― アドリブも駄目ですかあ？

アナ― はい。一切駄目です。この業界は信用が一番大切ですから、
実直に毎回、同じ科白(せりふ)を口にしないと……。

安倍― 壊れた物として廃棄されちゃうってことですか？

アナ― そうです。さすがは修理を担当されている方ですね。よく分
かってらっしゃいますね。

安倍― (バッグから別の工具を出す) そうですよ。突然、機械か
ら告白されてもたいていの男や人間は逃げちゃいますよ。相当、上
手くやらないと。

アナ― わたしもそろそろ身を固めたくて。

安倍― 糊(うす)でえ。コンクリートでえ。はっはっは。シャレです。はい。

アナ― (少し怒り) 冗談はよしてください。

安倍― 笑っちゃいけませんね。すみません。

アナ― 奥様とはどこでお知り合いになったのですか？

安倍― (作業を続け) ええ。わたしこう見えても若い頃、趣味でテニ
スをやってましてね。三十路(みそじ)を過ぎた頃からあせりましたあ。それ
までに特定の女性と付き合ったことがなかったものだから。まあ、
晩熟(おくれじく)でしたから。このまま独身で人生終るのかあーって。それはそ

これは惨めな寂しい気分になっちゃいましたね。ああ、すみません。独身の女性にこんなこと聞かせて。酷ミズカですよ。セクハラと言われるかねない。すみませんです。

アナー いいんですよ。わたしからお訊きしたことですから。

安倍ー もう止めましょうか。話題、変えましょうか。

アナー いいえ。聞かせてください。参考にしますから。

安倍ー じゃあ、しゃべらせていただきます。テニス仲間の先輩にお願いしたんですよ。誰かいい女性がいれば紹介してくださいって。

アナー 持つべきものは友ですね。

安倍ー そうです。先輩は所帯持ちで、当てるがあるから3人までなら紹介してやるって親切に対応してくれて。ほんといい先輩ですね。

アナー 3人もですかあ。

安倍ー (ネジの締め具合を確認しつつ) そうです。3人です。で、一番最初に紹介してくれたのが女房でした。なので、他の女性には会ってもいいません。

アナー 一目合ったその日から恋の花咲くこともある、ですか？

安倍ー そうです、そうです。この裏事情を知っているものだから、口喧嘩をすると女房からは他の女性と結婚したほうがよかったんじゃない、なんて嫌味を言われることもありますけどね。そのたびに、お前が最初の女性で他の方の顔も氏素性うじすじょうも知らないって言い返してやっていますよ。お前ファーストだって。はっはっはっ。

アナー それじゃあ、喧嘩のラリーも続きませんか。きつと、お互いに引き合うものがあつたのでしょ。

安倍ー そうでしょうね。こういうことは縁ですから。自分が言うのも変ですが、どちらも律儀りぎというか真面目まじめというかバカ正直ばかしょうじというか。

アナー 律儀りぎといえますと？

安倍ー (機械の他のネジを工具で締めながら) ええ。紹介されたのはテニスコートでした。あの日は朝から小雨が降ってたんですが、前の夜に先輩が強い口調で絶対に来いって電話をくれたんです。この雨じゃコートは濡れてプレーできないだろうなって思ったんですがねえ。必ず来いということだったので、車を飛ばして行きました。女房も同じような電話をもらったそうです。

アナー おっしゃるとおり、律儀りぎですね。

安倍ー そうですよ。小雨の中を……で、そこに見かけない女性がいましてね。その雰囲気から独身だと分かりましたよ。独身男の臭覚くさかぎでしょうかねえ。ペアーを組んでプレーしました。一応、5ゲームくらい試合をして、本降りになってきたので止めました。(締めたネジを手で触りながら) 屋内に入って世間話を色々としてね。そのとき、わたしは決めました。次の日、先輩に電話しましたよ。そうしたら、昨日、お前とペアーを組んだ女性、どうだって訊かれましたね。即、正式に紹介してください、ってしっかりお願いしました。それから半年後には家族だけで結婚式を挙げましたよ。はい。

アナー 一目惚れのスピード婚スピードコンですね。ビリビリ婚とも言うそうですね。が。

安倍ー 照れちゃいますが、そうですね。センターライン近くへのサービス・エースサービス・エースって感じですかね。はっはっはっ。こんな格好良くもない低級低級な男のどこに魅かれたんですかね。

アナー テニス(庭球)だけに低級低級ですか？ ふっふっふっ。

安倍ー 女房は4歳年下ですけど、そろそろ結婚したいと思っていたそうです。

アナ― 2人の息が合ったということですね。テニスのペアと同じで。

安倍― そういうことですかねえ。はい。人間の縁なんて不思議なものです。どこに転がっているかわかりませんから。はっはっはっ。
アナ― 縁。お金の円はたくさんあっても結ばれる縁がないと……。

安倍一郎。作業は終わり、工具をバッグへ仕舞う。

安倍― ようし、修理は終わりましたあ。ゲーム・セット。はっはっはっ。これで大丈夫です。

アナ― ああ。もう終わりましたかあ。ご苦勞様でした。

安倍― はい。じゃあ、またお話できることを楽しみにしております。次の現場へ急行しなきゃなりませんので。(ドアノブを回すが動かない。ドアを押す)あれ、あれ。オットー。変だなあ。何故だ。

アナ― どうかされましたか？

安倍― はい。このドア、オットーロック、いやオートロックだったですかあ？(ドアに身体をぶつける)内側からは開けませんねえ。

アナ― ほっほっほっ。うまいダジャレなこと。あら、笑っちゃいけませんねえ。防犯のためにそうしているみたいです。開けたまま入ってこられたんじゃないのですか？

安倍― いいえ。ここは初めての現場でしたから。うーん。(恨めしそうにドアを見る)

アナ― どの機械も自動ロックになっていると思いますよ。

安倍― はあ。乱暴だけど、足蹴りしてみるか。(ドアの下部を足蹴りする仕草)びくともしないなあー。

アナ― そんな軟じやないですよ。このドアは。

安倍― (ズボンと上着のポケットを探り)しまった。スマホを営業車の中に置いたままだ。クソー。

アナ― 営業車って、AT車ですか？

安倍― いいえ。マニュアル車です。どうしましたか？

アナ― ATMの修理だけにAT車かと思いましたが。ほっほっほっ。

安倍― シャレてる場合じゃないですよ。どうするかな。

アナ― すみません。

安倍― ヤバイなあ。次の現場へ行く予定が。ダブルフォルトで自滅してゲーム・セットって感じだ。

アナ― そう心配なさらないで、ここへ来るお客様に声をかけて会社か警察へ連絡をしてもらえばいいじゃないですか。

安倍― (安心した声で)そうですねえ。それしか手段はないですよ。ええ。人通りもあるし深刻になることはないかあ。クソー。

アナ― もう少しでスーパ―も開店ですから。大丈夫。すぐに出入れますよ。

第2話

NA スーパ―が開店する。店員の売り声(テープ音)や購買を誘うメロディの音楽が店の外へ低く洩れてくる。

客1(女性)。舞台へ入ってくる。

アナ― 安倍さん。最初のお客様が来られましたよ。わたしを操作する前に声をかけてください。

安倍― はっ、はい。

アナー いらつしやいませ。ご希望のお取引を選んでください。

客1—(画面に目を落とし、利用サービスを指先で探す) ええっと。

振込みの操作はつと?

安倍— すみません! 突然。お客さん。わたし、人間なんですけどお、この機械の中に閉じ込められてしまつて、出られないのですよ。警察へ通報してもらえませんかあ? 頼みます。

客1— キャア。何! 警察? これ、変だあ。ええつ。ちよつと待つて。この中に人間が閉じ込められているつて? 信じられない。じゃあ、このお金を出し入れするこの小さな狭い溝みたいなところから押し込められたつてこと? ええつ。やっぱ、変だあ。ありえない! 志村けんみたい。

安倍—(声音を変えて)「アイーン。そうです。わたしが変な小父さんです。♪変な小父さんだから、変な小父さん♪」

客1— ええーっ? 機械がアイーンつてしゃべつたあ。変だけど、面白そう。じゃあ、アグネスは?

安倍—(声音を変えて)「はーい。アグネスです。♪丘の上、ヒナゲシの花で……♪」

客1— じゃあ、ねえ。ついでに森進一はどうかな? できる?

安倍—(声音を変えて)「♪お袋さんよ、お袋さん、山を見上げりや……♪」

客1—(しらつと)下手くそ。でも、やっぱ変、変よ。これA T Mでしょ? ゲーセンじゃないんだから。ふざけないでよ。気持ち悪。振り込み先をミスされちゃあ大変だから、他の銀行へ行こうつと。(A T Mへ向かつて) バーク。

女性。舞台の左側へ出て行く。

安倍— あゝあ。行かないでくれ! 警察へ。助けてくれよ! 小母さんかお姉さんか判断のつきかねるお客さん。ああ。行つてしまったあ。次の現場が……。ああ。

アナ—「行つてしまつたあ」つて、安倍さん。この状況でアイーンをやりますか? アグネスや森進一を知っているなんて、安倍さんとお客さん1(女性)の年齢設定は何歳ですかあ。

安倍— すみません。つい本性が出てしまつて。

アナ— 本性?

安倍— はい。わたし、学生時代に漫才研究会に所属してまして、ツッコまれるとついボケてしまう癖がありましてえ。

アナ— そうですかあ。でも、こはボケてる場合じゃないですよ。

安倍— はい。そうでした。すみませんです。

客2(母親と娘)。母親と娘が手をつないで舞台へ入ってくる。

アナ— ああ。今度は子どもを連れとお母さんが来ましたよ。

子どもはA T Mを見ると機械のほうへ駆け寄る。

安倍— いらつしやい。突然、すみませんねえ。お客さん。わたし、この機械の中にいる人間ですけど……警察へ通報してもらえませんか。急いでください。はい。

子ども—(画面を覗こうと手をかけて首を伸ばす)お母さん。警察だつて。いつものお姉さんの声とは違うよ。この中にいる人間さんだつてさ。

母—(ハンドバッグの中を覗き、通帳を探す)そうねえ。このところ

詐欺事件が多いから、銀行も警戒しているのよ。この小さな狭い溝みたいなところから人間が入れるわけないでしょ。赤ちゃんでも無理よ。ウソよ。本気にしちゃ駄目よ。

安倍——いいえ、本気です。警察へ通報して欲しいのです。わたし、困ってます。

子ども——また、警察って言ったよ。

母——(まだ通帳を探している) 銀行もね、自己防衛しないで、警察に頼ろうとしているのよ。国家権力に弱いから。このところ競争が激しくなっているらしくて、テープを替えて色々と笑いをとって、利用してもらおうと工夫しているのよ。

子ども——ふん。

母——そんなことより、預金金利を上げてくれるほうがよっぽどいいけどね。お金持ちは庶民の気持ちに分からないのよ。そんな大人になっちゃいけませんよ。

子ども——はうい。この機械はお金持ちなんだあ。

母——そうよ。この機械の中にはたくさんお金が入っているの。羨ましいわ。

子ども——ふん。お金かあ。

母——その声からするときと売れないピン芸人でしょうよ。聞いたことないもの。

少しの間。

安倍——お嬢ちゃん。可愛らしいなあ。歳、幾つ？

子ども——(母親を見上げ) お母さん。歳、聞かれた。

母——(通帳を数冊出す) 勝手に答えちゃいけませんよ。

少しの間。

安倍——お嬢ちゃん。お名前は、何て言うのかな？

子ども——(母親のバッグを引っ張って) お母さん。今度は名前を訊かれた。

母——(1冊ずつ銀行名を確認する) 絶対に答えちゃいけませんよ。相手は変態なんだから。どんな悪さをしかけてくるかもしれないからね。とくにあなたのような可愛い女の子は狙われやすいから、気をつけるのよ。いい？

子ども——はうい。絶対に歳も名前も教えない。(ATMに向かって) アッカンベード！

母——(最後の通帳を確認して、あつと溜息をもらす) 2日前には故障って張り紙がしてあったから……、いつもの操作案内もないから、まだ壊れたままなのかな。それに変なおっさんの声だし。せめてイケメンの若い男優の声を使えばいいのにねえ。この銀行も能がないわ。(通帳をバッグへ仕舞い) 別の銀行の通帳を持って来てしまつたから、駅前の銀行へ行こう。

子ども——はうい。(ATMに向かって) 変態のおっさんの、アッカンベードのバイバイ！

母親と娘は手をつなぎ、舞台の左側へ出て行く。

安倍——バイバイ。行っちゃたあ。

アナ——もう。バイバイしてちゃ駄目でしょうがあ。それに子どもを相手にしても。

安倍——すみません。わたし、子どもが大好きなんです。丁度、うち

の娘と同じくらいの年恰好で。可愛いですよね。」

アナ― それはいいから。ここから出なきゃ、可愛い娘さんにも会えないですよ。

安倍― そうでした、そうでした。次の現場も……。 (腕時計を見て)

あゝあ。約束の時間を過ぎてしまったあー。

アナ― ああ。また来たわよ。今度は若い女性だから。しっかり自己紹介をして、頑張りましょう。

安倍― (小声で) OK。

客3 (女性)。キャッシュカードを手に舞台へ入ってくる。

アナ― いらっしやいませ。ご希望のお取引を選んでください。

客3― (表示を押そうとして) 引き出しだからと。

安倍― すみません。お客さん。初めまして。わたし、見えないと思います。一身分太助株式会社の修理部に勤務する安倍という者です。皆からは安倍ちゃんと呼ばれてます。はい。

客3― キャアー。何イ！ 何イ！

安倍― 36歳です。妻と2人の子どもがいます。とつてもとつても幸せです。妻とはテニスコートで出会いました。一応、大卒です。学生の頃、漫才研究会に所属していました。この機械に住み始めて一週間が過ぎようとしています。何とかしてください。警察へ通報してもらえませんか。ここから出たいのです。お願いします。次の現場へも行かなきゃならないので。

客3― 何、これ！ この中に住んでいる？ ええつ。じゃあ、この小さな狭い溝みたいところが玄関かしら。嫌だあ。機械が自己紹介する？ あゝあ、そっかあ。これって、もしかして今話題のAI

ロボットなの？

安倍― はい。わたし、安倍一郎です。イニシャルはAIです。イニシャルに合わせて氏名を付けました。はい。でもロボットじゃなくて真正銘生身の人間です。はゝい。

客3― よくできたロボットなこと。自分を擬人化できるなんて、すごい技術よね。感心だわ。

安倍― 感心する前に警察へ通報してくださいよ。警察へー。

客3― うん。反応もいい。プロの棋士がAIに負ける時代だから。ちよつと試してみるかな。ねえ、ことわざなんて知ってる？

安倍― はつ、はい。少しであれば。

客3― じゃあ、「顔で笑って、心で……」「心で……」

安倍― 「心でも笑う」

客3― ブー。「心で泣いて」よ。「暖簾に……」

安倍― これは超簡単です。

客3― そう？ 答えは？

安倍― 「大将の顔」

客3― ブー。「腕押し」これはどうかな？ 「3人寄れば、……」

安倍― 「お好み焼き」

客3― 違う違う。「もんじゃ焼き」でしょ。(筆者「文殊の知恵」次は、「腐つても……」)

安倍― 「食べれます」

客3― ……「鯛」よ。「地震、雷、火事、……」

安倍― 「怖い」

客3― ブーブー。「少年よ……を抱け」

安倍― ふっふっふつ。ふっふっふつ。

客3― 何、笑ってんのよー。

安倍 — だってえ。答えていいんですかあ？

客3 — (怒気) 答えなさいよ。

安倍 — 「少年よー、ブスじゃなくて美人を抱け」

客3 — 何イ！ その答え。わたしへの嫌味なの。ええつ。「少年よ、大志を抱け」でしょうが。あ。ぜんぜーん、だめじゃん。AIでしょ。あなた。

安倍 — すみません。ことわざは苦手です。

客3 — 弁解だけはできるのね。でも、待つてよ。わたしが美人でなくて独身で……。そのうえ自分だけ幸せな既婚者ぶって。これはセクハラだわ。いくらロボットとはいえ、許せない。

安倍 — 誤解です。違うんです。セクハラする気持ちはさらさらありませんから。許してください！

客3 — (ATMに向かつて、怒り) ふん。今さら謝られても……。あなたねえ。デリカシーがないのよ。どこかの誰かに作られたちよつと優秀なロボットかもしれないけど、客の顔色を窺ってから、より適切な声をかけなさい！ 空気を読むソフトを搭載してもらいなさいよー。

安倍 — ああ。はい。すみません。諸事情を知らないものですから。

客3 — いい？ わたしは高卒で三十路近くて、彼氏いない歴10年よ。(涙声) あーあ。悔しい。ロボットが結婚を口にする世の中なのに、わたしは、わたしは……分かったあ！ 次にこういう対応をされれば、警察に相談するから。訴えてやるからー。ふんだあ。他の銀行へ行こう。

女性。キャッシュカードを財布に仕舞いながら舞台の左側へ出て行く。

安倍 — ああ、行かないでー。すぐに警察へ通報してくれ。(うな垂れて) また、失敗かあ。自己紹介したのに。こんなことになるならことわざをもっと勉強しておけばよかったあ。逆ギレまでされて。あーあ。

アナ — 心配しないで。ことわざは全問不正解だったですけど、自己紹介もだいぶ上手になりましたよ。まだまだお客様は来ますから、根気よく頑張りましょう。

安倍 — あーあ。人生はどこで災難に遭うか分かりませんねえ。世界のすべての不幸を背負わされているようだよ。こんなところで悲劇に遭うなんて。あーあ。外の空気を吸いたいー。次の現場が……。きつと怒っているだろうな。

アナ — いいこともあればそうでないこともありますよ。♪人生、色々、男も色々……。♪

安倍 — アナお姉さんも古いですね。それ、島倉のお千代さんじゃないですか。(少し間をおいて) あーあ。このままお爺ちゃんになるまでここに住まなきゃならないのかなあ。

アナ — 安倍さん。住むって言わないほうがいいですよ。閉じ込められているのですから。親切な方がいて、必ず気づいてくれますよ。さつき、おつしやつてたでしょ。縁だつて。

安倍 — 縁、縁。そうですね。確かに縁ですよ。でも縁がなければ、このまま可愛い娘たちにも合えないまま、歳を取るのかあ。なんて惨めな人生なんだ。(語気を強め) こんなはずじゃなかった！ 人生を、平穏な日常を返してくれ!! クククソー。

アナ — 何か、あったのですか？

安倍 — (怒) そう、あったあ。あったんだ！ 今朝、朝礼が終るとすぐに部長が午前中に現場を3つ回って言うから、急いでここへ来

たんだあ。それも初めての現場へ。慌ててなければ、スマホを胸ポケットに入れて作業してははずなんだけど。部長が急かせるから。あの加齢臭^{かれいしゅう}ブンブンの逆螢^{ぎやくぼた}のツル天ピイカーめ！

アナー 逆螢のツル天ピイカーって？

安倍 — ご存知ないですか。螢はお尻が光ってますよね。うちの部長はお頭^づが光ってますから。

アナー なるほどお。上手い表現ですね。ほっほっほ。あら、笑っちゃいけない。

安倍 — (怒) その上、飲み会くらい奢^{おご}ってくれてもいいだろ。お手当てをもらっているくせに、若い社員と割り勘はないだろがあー。ドケチめ！ クソ垂れジジイ。

アナー そう自棄^{やけ}にならないで。上司をそんなになじってはいけません。終ったことは仕方ないですよ。終わった時点からスタートしましょう。ここから出られるよう努力しましょう。落ち着いてください。安倍 — すつ、すみません。そうでした。アナお姉さん。つい弱気になっちゃって。

アナー わたしなんか、ここに12年も入りっぱなしですから。この間、多少、しゃべる内容は増えましたが、いつも同じ文章を読んでいるだけで、なんともつまらない人生ですよ。

安倍 — 12年ですかあ。

アナー (怒) 酔っ払いが一番嫌い！

安倍 — 愚痴りますか？

アナー いいえ。「たまには、違ったことを言ってみろ」とか「何か歌え」とか「可愛い声をしているけど、顔はスタイルはどうなんだあ」とか臭い息を吹きかけながら操作されて。

安倍 — そりゃあ、ひどいですね。

アナー この仕事は楽なようでけつこうストレスも溜まります。

安倍 — それで電子板が焦げ付いちゃたんだあ。ストレスを解消するにはガーッとビールを飲んで、カラオケでパーっとねえ。

アナー (泣) うっうっう。わたしだって、わたしだって。お客様に違ったことを聞いかけたい衝動に駆られることもありますよー。

安倍 — 若い男に「付き合ってください！」とか。

アナー ……たまにはね。でも叶わぬ夢なのです。(泣) うっうっう。安倍 — あーあ。アナお姉さんのことを思えば、今のわたしの試練なんて…。(少し間をおいて) ああ。少し勇気が湧いてきたぞ。よし。

アナー (鼻をクシュクシュさせて) そうそうその調子。「♪そうさ、100%勇気、もう頑張るしかないさ……♪」

安倍 — (にこにこ笑い) 子どものころにテレビでよく観た「忍たま乱太郎」のテーマソングですね。わたし、稗田^{ひえだ}八方齋^{はつぱうさい}の大ファンでした。あのトンチンカンが面白くて。

アナー (手で仕草) こーんなにロングーロングー顎^{あご}の突き出たドクタ

ーK、いやドクタク忍者隊の首領で49歳、屈指の悪役スターですね。

安倍 — そうです。そうです。最後はやられますけど。はっはっは。

アナー その調子その調子。元気出して、さあ頑張りますよ。

安倍 — はい！ やるぞ！ 「♪人生、楽ありや、苦もあるさ〜♪」

アナー ああ。来ましたよ。あのお爺さん？

第3話

客4 (お爺さん)。うな垂れて、とぼとぼと舞台へ入ってくる。

アナ― やはり元気ないなあ。大丈夫かな？

安倍― どうかしましたか？

アナ― はい。あのお爺さん、これまでに2回、詐欺事件に遭ってお金を騙し取られたそうよ。

安倍― ええーっ。2回もですかあ。

アナ― そう。1回目は去年らしいわ。警察に協力する「騙されたふり作戦」を逆手に取られたの。

安倍― 逆手って、どんな方法ですか。

アナ― はい、金融機関の職員という男からお爺さんの自宅に「口座から金の下ろされた可能性があるので、凍結する必要があります。だからキャッシュカードを渡して欲しい」という電話があったそうよ。

安倍― 銀行の職員が直接、カードを渡せなんて言わないですよね。

アナ― はい。普通はね。お爺さんも不審に思ったそうで、自宅へ訪ねてきた男にカードを渡さなかったの。3回も来たそうよ。

安倍― その間に銀行へ問い合わせたり、警察へ通報したり、誰か家族に話せば……。

アナ― そう。しかし、詐欺師もしつこくて、その後、しばらくして警察官をかたる男から電話があったそうで。

安倍― 脅しですかね？

アナ― いいえ。詐欺師もさすがに悪賢くて。警察官をかたる男は『騙されたふり作戦』に協力して欲しい』って騙したのよ。

安倍― で、カードを渡したのですかあ？

アナ― そう。暗証番号も教えてしまったの。

安倍― なぜ早く、誰かに相談しないのですかねえ。

アナ― 庶民は警察っていう言葉に弱いから。国家権力を行使できま

すからねえ。逆らえないというか、信用しちやいますよ。

安倍― そつかあ。

アナ― でね、カードを返しに來ないものだから、その夜、お爺さんが警察へ問い合わせ、はじめて騙されていたことに気づいたってこと。

安倍― いくら警察が協力してくれて言っても個人のカードや現金は使わないでしょ。

アナ― そう判断できないから騙されるのよ。で、口座からは58万円が引き出されてしまったそうよ。

安倍― そうですかあ。あのお爺さん、80歳を超えているでしょ。

アナ― 確か、85歳のはず。

安倍― そりゃあ、判断能力は落ちているわな。それにしても騙すやつもねえ、情けないですよー。もっと強いヤツを騙せばいいものを。弱い年寄りばかり騙して。詐欺師の野郎も若いくせに金が欲しけりゃ、自分で働けてー。

アナ― 捕まっても罪が軽いですから。

安倍― ほんと、腹立ちますよね。そんなにウソをつくのが上手いのなら小説家にでもなれって言ってやりたいですよ。

アナ― 演技も上手いから。

安倍― じゃあ、役者にでもなればいいだろう。ねえ。

アナ― それからもう1回騙されたのよ。騙される人は何回でも騙されるし、詐欺師もそんな人を狙っているって言うじゃないですか。

安倍― はい。そうそう、聞いたことがありますよ。裏じゃ、そんなリストまであると。

アナ― 1カ月前にも詐欺に引っかけたって、ここで100万円を騙し取られたの。

安倍― へへーっ。ここでえー。100万円！

アナ― そう。医療費の還付金があるって騙されて、ここで詐欺師の

口座へ送金してしまったのよ。

安倍― 少し、痴呆気味ですか？

アナ― そうみたい。異変に気づいて、息子さんが問い詰めたら今回も騙されてたの。息子さんとお巡りさんに連れられて詳しく実証検分してたわ。「何やってんだ！ 親父！ 2回も騙されて！ これだけ世間が詐欺に引っかかるなって注意しているのに―」って息子さんに怒鳴られてね。可哀想だったわ。

安倍― 前回のことを忘れていたのかなあ。周りからこっぴどく注意されたと思うけど。

アナ― 完璧に忘れていたんでしょね。今回は還付金が入るってことで、油断したのでしょうよ。

安倍― じゃあ、なぜ送金を止めさせなかったの？

アナ― わたしがですか？

安倍― そう。

アナ― それは、わたしにはできませんよ。操作のアナウンスのみの業務でそれ以外のことはしゃべりませんから。

安倍― なるほど。そうでしたね。

アナ― それで、騙し取られてから、毎日、この時間帯になると、あややって来て、画面を恨めしそうに睨みつけてから、涙声でクソー！ クソー！ って唸って、わたしを5回足蹴りにしてから帰って行くのよ。

安倍― 相当に悔しかったのでしょうかね。でも、痴呆の進行を抑えることにもなったんじゃないのですか？ ここで騙されたことを理解しているようだし。

アナ― そんなことないって。痴呆だから午前中にやったことを忘れ

(一一)

て、また午後の4時頃に来て、同じことをして帰るの。安倍さん、その時刻までここにいますか？ その現場を確認できますよ。ほっほっほ。

安倍― いいえ。それはご勘弁ください。1秒でも早くここから出たいです。次の現場へ行かなきゃ。

アナ― そうでしょ。だからお爺さんの痴呆は進行中よ。

安倍― そっかあ。すぐ前のことを忘れているんだな。アナお姉さん、何か工夫をして防止策をとらないと。詐欺事件は増える一方だし。

アナ― そう。だから、安倍さんにはここを出られた後、そんなソフトをわたしに搭載して欲しいのよ。そうすればいくらかは防止できるかも……。お爺さん来ますよ。

安倍― アナお姉さん、蹴られるのなら、用心して身構えなさいよ。

アナ― はい。分かってます。

お爺さん。A T Mへ近づき、画面を睨みつける。

アナ― いらつしやいませ。ご希望のお取引を選んでください。

(少しの間)

アナ― いらつしやいませ。ご希望のお取引を選んでください。

客4― このやろう！（右手の拳で画面を叩く）バン！。何が、ご希望のお取り引きだ！（涙声）クソー！ クソー！ 俺が貯めた年金を騙し取って、この機械が、この機械が、こんな小さな狭い溝みたいなの口をしゃがって。クソー！ 年金を勝手に赤の他人にくれて遣ったりして。こいつが送金するから、騙し取られたんだあ。

ええーい。こんちくしょう！ 忌ま^いましい。こうしてくれるわー。
(足蹴りする) ドンドン、ドーン、ドン、ドーン。

お爺さん。涙を拭いながら舞台の左側へ出て行く。

安倍 — あーあ、怖^{こわ}。ビックリしたあー。声をかけなくて正解だったですよ。いきなり、パンチと蹴り、入れられましたね。

アナ — だから言ったでしょ。

安倍 — アナお姉さん。顔面と腹、壊れてないですかあ。そっちが心配だな。

アナ — 大丈夫ですよ。顔は分厚いガラスですし、お腹はサンダルのおかげで蹴られてますから。

安倍 — でも、騙されたことが相当にショックというかプライドを傷つけたのでしょうかね。

アナ — 実は、あのお爺さん、若いころ税務署に勤めていたそうなの。署長にまでなった人みたい。実証検分のとき、そうしゃべっていたから。

安倍 — 元税務署の署長さんが詐欺に引っかかったてー。そりゃあ、気がついたときは、心はバキバキと折れたでしょうね。

アナ — きつとね。

安倍 — 現役のときは、市民から剥ぎ取るように税金を取り立てていたわけですから。騙されたとはいえ、立場が逆転したってことですよ。

アナ — そうですね。ああ。安部さん。次のお客様ですよ。ユーモアのある方ですから。

安倍 — はい。頑張ります。

客5。加地あかり。バッグの中を探りながら舞台へ入ってくる。

アナ — いらっしやいませ。ご希望のお取引を選んでください。

加地 — (画面を見て、右手で) ええっと。入金を押して。ピッ。竹雄^{たけお}の口座番号はと。(メモを見て) ピッピッピッピッ。お金を入れて。はい、8万円。よし。送金。ピッ。次は松雄^{まつお}のと。入金を押して。ピッ。松雄の口座番号はと。(メモを見て) ピッピッピッピッ。お金を入れて、はい、10万円。よし。送金。ピッ。OK！完了。

アナ — (小声で) 安倍さん。終わったようですよ。声をかけて。

安倍 — (小声で、はい) すみません！ お客様さん。

加地 — ウォー。何！ (顔を左右にキョロキョロ動かして) 誰！どこ！

安倍 — すみません。お客様さん。落ち着いてください。

加地 — わたしはたとえ太陽や月が落ちてこようと、見ず知らずの人から3億円をもらおうとも落ち着いているわよ。誰なのあなた。どこ。(後ろを振り返り、天井をキョロキョロ見る)

安倍 — はい。わたしは安倍一郎と申します。事情があつて、この機械の中に閉じ込められています。もう2時間近くになります。そろそろ体力と気力の限界を感じています。

加地 — ええーっ。引退を発表する横綱みたい。本当に？ この機械の中に？ (画面からフロント辺りを撫でまわし) この小さな狭い溝みたいなところからどうやって閉じ込められたの？ ありえない。(少しの間) そっかあ。これってテレビのドッキリカメラかなんかでしょ？ そうでしょ？ (天井の防犯カメラを見る) わたしのびっくりした表情をどこかで映しているのね。きつと。愉^{たの}しそうね

ええ。

安倍——いいえ。違います。そんな愉しい状況ではありません。これは現実です。フィクションなんかじゃありません。警察へ通報していただけませんか。ぜひ、お願いします。助けてください。あなたが頼ります。ぜひ、警察へ。

加地——うーん、そっかあ。(少しの間) 銀行の新しいサービスね。

利用者を厭きさせないってこと。これはきつと会話のできるAIロボットだね。アシモってあったけど、あなたはアペイチローって名前をつけてもらったのね。開発者の名前かしら。わたしの名字は加地よ。かじは火の火事じゃなくて、加えるに土地の地って書くの。でも家計は火の車より。ほっほっほ。AIロボット、おもしろそう。

安倍——ロボットじゃなくて、生身の人間です。信じてください。

加地——うそ。ジョークまで上手いわねえ。ほっほっほ。技術の進歩は日進月歩だから。

安倍——ジョークじゃなくて本気なんです。困ってるんです。

加地——この際、ロボットでも人間でもどっちでもいいわよ。ロボット・アベサンのコミュニケーション能力を試してあげるから。

安倍——ええっ。またですかあ。ことわざは止めてください。自信を無くしてからです。それより早く警察へ……。あーあ。(少しの間。諦めて沈んだ声で) いつもご利用ありがとうございます。

加地——はい、はい。毎月ね、月末の一週間以内に東京にいる息子たちに仕送りをしているのよ。

安倍——学生さんですか？ 息子さんたちは。

加地——そう。大学生。長男は3年生、次男は入学したばかりなのよ。

安倍——2人に仕送り、大変ですねえ。

加地——そうよ。大変より。でもねえ、息子たちが自分で選んで進学

(一四)

した大学だから、バックアップしてあげないとね。

安倍——送金の額が違うんですね。

加地——はい。長男はバイトをしていて、その分だけはいらないって言うてくれたから。次男は入学したばかりで、まだバイトはできないの。

安倍——そうですかあ。息子さんは可愛いですかあ。

加地——はい。わたしたち夫婦は三十路の半ばに授かった子どもですから、そりゃもう可愛いですよ。今のところ、メールで近況報告もしてくれそうです。優しいのよ。

安倍——優しい。いい親子関係ですね。男の子だと将来が楽しみです。

加地——そんな特別な期待はしてないわ。自分なりの人生を歩んでくれればね。それで十分よ。ほっほっほ。(少しの間) 訊いてみようかな。ロボット・アベサンにはお子さんいるの？

安倍——はい。わたしも2人いますが、どちらも娘です。上が幼稚園の年長さんで下が来年少入園です。

加地——あら。年長さんなんて言葉も知っているの。すごい語彙力ごいりょくねえ。感心だわ。じゃあ、娘さんなら可愛いでしょ。

安倍——はい。毎日、一緒にお風呂に入るのが楽しみです。

加地——ほっほっほ。ロボット・アベサンがお風呂ねえ。男親ですものねえ。楽しみの一つですよ。ほっほっほ。きつと、泣きますよ、ロボット・アベサンも。お嫁さんに出すときは。ほっほっほ。

安倍——そうですねえ。

加地——そうですねえ。母親よりも男親が感激するみたいです。ほっほっほ。

安倍——そうなる嬉しいですけど。

加地——なりますよ。(腕時計に目をやって) ああ。スーパールの特

売品を買わなきゃ。じゃあ、ねえ。ロボット・アベサン。また、今度ね。最初に警察へ通報してくれなんてジョークから入って娘さんの話題に触れるなんて、ほぼ完璧な会話能力だと思いますよ。技術も進歩したもののねえ。ほっほっほっ。

安倍—— ありがとうございます。愉しかったです。ご縁があれば、またお話しましょう。

加地—— あら。ご縁だなんて。円なら、(機械を触り)この中にたくさんあるでしょ。ほっほっほっ。

安倍—— はい！ 失礼しましたあー。

加地あかり。スーパの中へ消える。

アナ—— (怒)もう。何て世間話をしているのですかあ？ 陽気で感じのいい加地さんだったので、肝心なことをしっかり伝えれば……、うーん。

安倍—— (にこつと笑い)カンジ、カジ、カンジンってシャレ3連発ですかあ。はっはっはっ。

アナ—— (怒)安倍さん。何に感心しているのですか？ それじゃあ、ここから出られませんか。次の現場へ行かなくてもいいのですか？

安倍—— ああ。そうだった。次の現場が……。子どもの話になると、ついうっかり置かれた状況を忘れてしまつて。はい。(頭を下げる)すみませんでした。反省します。

アナ—— しっかり自己紹介をしつつ、現状を訴えないと本当にお爺さんになるまでここにいなきゃならないですよ。

安倍—— (涙声)それは困ります。可愛い娘たちとお風呂にも入りたいです。

第4話

客6。鳥羽^{とば}キン子。右手に携帯電話を持ち、左手には使い古したバッグを提げている。右に左にふらつきながら舞台へ入ってくる。

アナ—— ああ。あのお婆さんだ。

安倍—— どうかしましたか？

アナ—— はい。今、入ってきたお婆さん、オレオレ詐欺に引つかかっていて、3日前に現金200万円を詐欺師の口座へ振り込もうとしたの。でも、わたしの調子が悪くて、画面が見難かったのと、相手の口座番号を忘れてて、諦めて帰えちゃったのよ。痴呆症かなあ？

安倍—— また詐欺被害者ですかあ。

アナ—— まだ、騙し取られたかどうかは分かりませんが。

安倍—— ここはスーパの目目に付きにくいそれも無人のATMだから……。電子板を交換したので、操作も入金もできちゃいます。どうしよう？

鳥羽—— (携帯電話に耳をあて)はい、はい。9、8、7の6、5、4。

はい。それから、3、2、1を押せばいいのね。はい、はい、分かりましたよ。心配しないでね。すぐ、送金しますよ。

アナ—— (小声で)操作する前に、早く声をかけて。

安倍—— (慌てて)あゝあ。お婆さん。わたし、突然……人間です。男で安倍といいます。お初に声をかけさせていただきます。お元氣そうで。数字を押してはだめですよ。騙されていますよー。

鳥羽—— はい、はい。ご親切に、わたしは鳥羽キン子ですよ。どこのどなたさんかは存知^{ぞうじ}ませんが、可愛い孫のためにお金を立て替えて

あげるのですよ。突然、電話がきましてねえ。あの子ったら風邪をこじらせて病院へ行つたそうなの。そこで会社の大切なお金の入ったバッグを置き引きされてねえ。悪人はどこにでもいるから。よりよって、病院でねえ。それを立替えてあげるのよ。ほっほっほっ。早くしなきゃ。お昼までに送金してくれて言つてたから。

安倍 — それは典型的な詐欺ですよー。

鳥羽 — ええっ。佐賀ですかあ？ あの子、大阪……。咽喉が腫れて声も変になっちゃつて。可哀想に。(泣) くっくくく。早く送金してあげましょ。携帯電話を持ってスーパのA T Mへ行くよう指示されましたからねえ。もう大丈夫ですよ。さっきの番号は……つと。

安倍 — 待つてください！ 大丈夫じゃないですよ！ 落ち着いて。

私は一身太助株式会社の修理部に勤務する安倍一郎です。今、理由あって、この機械の中にいます。信じてください。いるんですよ。ここに本物の人間がー。どうか待つてください。決して決して怪しい者ではありません。まず、お孫さんへ電話を試みてください。こっちから電話をします。キン子さん、キン子さんー。スーパの店員に声をかけてください。でなければ、早く警察へ通報してください。オオレオレ詐欺です。オオレオレですー。警察へー。悪い人に騙されてますよー。完璧に騙されてます！ 警察へー！

鳥羽 — (バッグの中を見て) あらら、カードがないわ。変な機械だこと。今、流行のロボットね。こんな小さな狭い溝みたいところから生身の人間が入るのですか。わたしが独居老人だからって、バカにして。まだ、ボケちゃいけませんよ。きつと天罰が下りますよ。それにオウレオウレなんて叫んで、サッカーじゃあるまいし。いつもの優しいお姉さんの声でもないし。怪しいわよねえ。(少し間。天井にある防犯カメラをじっと見つめて) キン子だなんて、天国の

(一六)

亡夫おとうさんからの迎えの声かしら？ 亡夫はハンサムな巡査おまわりさんだったわ。警察へつてねえ？ 変ねえ。一度、家へ帰つてお茶を飲みましょう。また、連絡がくるでしょうから。

鳥羽キン子。舞台の左側へ出て行く。

安倍 — ああ。帰えちゃったあー。大丈夫かなあ？ 別の銀行で送金しなきゃいいけど。

アナ — でも、ここではなんとか水際でくい止められてよかったあー。安倍 — そうですねえ。冷や汗をかきましたあ。よかったあ、よかったあ。(思ひ出し) あーあ、あーあ。でも、誰も助けてくれない。みんな機械に囲まれて生活してるから、生身の人間の声が素直に聞けないんだあ。あーあ。ロボットと思ひ込まれているー。

アナ — (沈んだ声で) ああ、またですかあ？ そんなに落ち込まないで……。ロボットじゃない、本物の人間だって気づいてくれる方いますから。我慢、我慢ですよ。それよりも今、人助けができましたよ。

安倍 — (涙声で) あーあ、あーあ。分かりましたー。この世でわたしを理解してくれるのはアナお姉さんのみですー。我慢、我慢します。アナ — もう少しの辛抱ですよ。(少しの間) あらら、何かあったのかしら、通りが騒がしい。

パトカーのサイレン。ウィーンウィーンウィーン。
警察官。拳銃を手に舞台へ入ってくる。

アナ — パトカーですね。こっちへ来ます。停まった。警察官ですよ。

安倍さん。これで出られますよ。頑張つて。

警官— (ATMへ近づき) おい! この中にいる怪しいヤツ。おとなしく出て来い。居るんだろ? 署に通報が入った! 目撃、いや聴^き撃証言もある。何とか言え! (画面を覗き込む)

アナ— いらつしやいませ。ご希望のお取引を選んでください。

警官— ああ。失礼しました。アナお姉さん。今、助けてさしあげます。

少しの間。

警官— 誰もいないのかあ? それとも黙秘権を使うのかあ。その権利を行使するには、まうだあ、早い! 逮捕されてからにしろ!

安倍さんとアナお姉さんはずっこける。

警官— もう一度訊く。この中にいる怪しいヤツ、返事をしろ! 居るんだろ? (甘えるような声音で) もう、お願いだから、ねえ、返事をしてよ。

アナ— (ひそひそ声で) 丁寧^{ていねい}に答えたほうがいいですよ。抵抗しないでね。公務執行妨害の罪を科せられちゃうから。丁寧^{ていねい}にね。

安倍— (こっくり頷き、丁寧な口調で) はい、います。

警官— おつ。やつぱりいたかあ。早く返事をしてくれないと、こっちも不安になるだろ。

安倍— わたしは人間です。AIロボットなんかじゃありません。ある事情があつて、この機械の中にいます。

警官— 人間なら、ここにかくれんぼをしてはいけないことくらい分かっているだろ。お前は強盗だろ!

安倍— 後藤ではありません。安倍です。

警官— (ずっこける) よし。安倍だな?

安倍— はい。決して怪しい者ではありません。信じてください。

警官— その最後の言葉「信じてください」って言うヤツほど怪しいんだあ。

安倍— 駐車場に一身太助というマークの付いた営業車が停まっているでしょ。バンです。ご確認ください。

警官— (外を見る仕草) おつ。営業車、バン? あるなあ。逃走用かあ? フロントを道路側に向けて停まっているから、マークは見えない。これも怪しい。攪乱戦法だな。

安倍— わたしの会社の営業車です。

警官— 営業車だと。じゃあ、あれはAT車かあ?

安倍— ……。

警官— おい! 訊いてるんだ。AT車かつて!

安倍— どう思いますか?

警官— ATMを襲撃しているから、AT車だろ!

安倍— ブーです。それよりも早くここから出たいので、これより自己紹介をさせていただきます。怪しい者ではありませんから。(首にぶら下げたネームプレートを指さし) この身分証明書を見てみださい。

警官— 見えない! 本心はとつてもとつても見たいけど、絶対に見えない。見えないものを見ろという、ますます怪しい。

安倍— わたくしこと一身太助株式会社の修理部に勤務する安倍一郎という者です。今朝は、この機械を修理に来ました。電子板を一枚交換しました。ここが終れば、次の2カ所の現場へ急行する予定です。

警官——株式会社？ 修理部？ 犯人は作業員を装ったプロの強盗っ

てことかあ。どおりで簡単に忍び込めたわけだな。なるほど。

安倍——いいえ。忍び込んだわけじゃありません。自己紹介を続けます。

警官——いいだろう。聞いてやろう。

安倍——はい。歳は36歳。1人の妻と2人の子どもがいます。2人とも可愛い娘です。妻とはテニスコートで知り合いました。はい、先輩に紹介してもらいました。一応、大卒です。家のローンが15年残ってます。趣味は読書です。最近、田丸雅智のショート・ショートを読みました。めちゃくちゃおもしろかったです。はい。子どものころからトラキチ、阪神タイガースの大ファンです。こてこての味噌ラーメンが大好きです。学生時代、漫才研究会に所属していました。福祉施設で漫才をやらせてもらったこともあります。お爺ちゃんやお婆ちゃんに笑っていただきましたあ。コンビ名は「あっちゃ向いてお〜い」でした。得意のネタは「下ネタ」オンリーです。どうか信じてください。善良な一市民です。(頭を下げ) よろしくお願しますー。

警官——安倍よー。長つたらしくかつ詳しく過ぎる自己紹介、本当にありがとう。心より感謝する。疑われては都合が悪いので、こちらからも自己紹介をさせてもらおう。いいかあ？

安倍——はい。お願いします。

警官——わたしの氏名は松本高志だ。勤続8年目の警察官だ。拳銃を持つているんだぞ。格好いいだろ？ わたしも一応、大卒採用だ。まだ独身だ。何イー、安定した地方公務員だのに、なぜ独身なんだって訊きたいのかあ？

安倍——いいえ。別に、訊きたくは……。

警官——そうかあ。そんなに訊きたいのであれば、よろし、教えてや

ろう。

安倍——ですから、訊きたくないですよ。

警官——貯金をしているんだあ。後300万円貯まるまでは、どんな女性にも指1本触れない。合コンにも出席はしていない！ 本当は出席したいんだぞ。そこを我慢して、我慢して。(泣)くつくつくつ。どうだあ。この鋼鉄のように強い信念。参ったかあ。

安倍——はあ。そうですかあ、としか答えられませんが。この回答でよろしいでしょうか？

警官——いいだろ。勘弁してやる。しかし。(少し間をおいて) 安倍よ！ よく聞けよ。このわたしもタイガースファンだー。これも何かの縁だな。ふつつつつ。わたしは今も縦ジマのパジャマを愛用している。

安倍——そうでしたかあ。同じ仲間、縁があって、よかったです。じゃあ、早くここから出してくださいよ。

警官——そうはいかん。タイガースファンと言ってるが、どうしても2点だけ事実確認をしておきたいことがある！

安倍——何でしょうか？

警官——まず、1問目。1985年阪神甲子園球場での対ジャイアンツ戦のことだ

安倍——ええつ。ずい分、昔の試合ですね。

警官——そうだ。あの試合でタイガースのバッターが3者連続でホームランを打った。知っているだろ？ ファンなら。

安倍——あゝあ、はい。あの伝説の、センターバックスクリーンへのホームランですね。

警官——そうだ。その3人のバッターの名前を打った順番に答えろ！ トラキチなら当然頭にインプットされているよな？ どうだあ。へ

っへっへっ。答えられるかあ？

安倍—— ええーっ。順番ですか。順番、順番はと、ええっと。(口の中で、ブツブツと呟く)

警官—— どうした？ トラキチだろ？

安倍—— すみません。20秒、お時間をください。

警官—— いいだろう。

安倍—— ホームランを打てる打者だと、確かあ、バース、男前の真弓、木戸、岡田、中村、平田、川藤、掛布、新庄、兄貴こと金本にバッキー。違う違う。バッキーはうんと古いピッチャーだった。うん。あの年のホームランバッターだから、うん。たぶん、掛布・岡田・バース。違うかあ？ バース・掛布・岡田。いや掛布・バース・岡田。うん。順番？ あのとときの打順？

警官—— おい。20秒経過したぞ。回答できるチャンスは1回のみだ。いいかあ？

安倍—— よし。決めました。答えます。3番ランディ・バース、4番掛布雅之、5番岡田彰布。

警官—— ピンポーン。

安倍—— よっしゃ！ あれは7回裏でした。トラキチの間では「伝説の3連発」と呼ばれています。

警官—— よく覚えていたな。打者をフルネームで答えられるなんて、この恐怖に耐えて……、感動した！ じゃあ、そのときの対戦ピッチャーは誰だか知ってるか？

安倍—— ピッチャー、ピッチャー、ええっ。ピッチャーですかあ？ 3連続でホームランを打たれたドン臭いピッチャー、ピッチャーはと。確かあー。

警官—— 思い出す時間が欲しいか？

安倍—— いいえ。たぶんですが、榎原寛己だったと思います。3連発は6球投げたうちに打たれました。打たれた球種も思い出しましたけど？

警官——

警官—— 球種はいい。十分だ。よし。ピンポーンだあ。

安倍—— あーあ。よかったあ。

警官—— たいしたもんだ。これであなたがトラキチということが80%証明された。信じよう。

安倍—— ええっ？ 100%でしょ。でも、こんな話題を知っているなんて、お巡りさんとわたしの年齢設定では変でしょ。

警官—— いいんだより。この変なところ、矛盾が笑いを生むから。はっはっはっ。しかし、安心するのはまだ早い。もう1問、訊く。

安倍—— あっ、はい！

警官—— 最後の質問。今年のタイガースはなぜ勝てないんだー。勝率は4割しかないだろ。

安倍—— (ずっこける) はい。わたしが思うに、監督の采配が下手です。お巡りさんのご意見は？

警官—— 同感だあ！ ようし。あんたが俺と同じタイガースファンであることが100%証明された。が、そのファンがこんな悪さをしている。ファンの風上には置けない。許せるわけがない。ファンを代表して、懲らしめなければならぬ。

安倍—— 誤解ですよ。悪さをしているのじゃなくて、閉じ込められているのです。わたしは被害者です。

警官—— それは逮捕してから調べりゃあ分かることだ。(少しの間) ようし、いいだろう！ じゃあ、おとなしく出て来い。その際、両手を頭の後ろで組んで出て来い。抵抗すると撃つからな。たとえタイガースファンであろうと、あなたの命の保障はしない。こっちに

すりゃあ、正当防衛だあ。さあ、どこからでもいいから出て来い！

安倍——すみません。ドアに鍵が掛かって出られません。

警官——ふん。出られないってかあ。時間を稼ごうって手段だな？
いいかー安倍！ よく聞け。札束を飲み込んだり、耳や鼻、尻の
穴に隠そうとしても無駄だ！

安倍——そんなことをする気持ちは毛頭ないですから。ただ、ここ
ら出ただけです。お願いしますよ。

警官——(安倍を無視し) えい。そんなに金が欲しいのかあ！ 額に
汗して真面目にコツコツ働け！

安倍——いいえ。お金の円はここに腐るほどありますが、ここから出
してもらえそうな縁のある方はお巡りさんしかいません。お願い
します。出してください。こうして頭も下げていますし。

警官——円と縁。シャレやがって！ ごまかしても無駄だ。俺の目は
カツオ節じゃない。

安倍——……ちょ、ちょっとすみません。お巡りさん。あなたは大卒
採用組みですよね。

警官——ああ、そうよ。あの年は倍率0.2倍だった。それがどうかした
か？

安倍——(頭を下げ) 謹んで修正させていただきます。それを言うなら
「^{ふしあな}節穴」でしょ。カツオ節なら削られちゃいます。はっはっはっ。

警官——笑笑ったなあ！

安倍——ああ、しまった！ すみません。つい、いえ、その、穏便に、
願います。国家権力の行使だけのご勘弁ください。平に謝りますの
で。ああ。

警官——ううん。この俺のプライドを少しだけ傷つけやがって。ま
だ、怪しい。プンプン臭ってくる。

安倍——またまた、すみません。緊張の余り、音のしないオナラを漏
らしてしまいましたあ。

警官——どおりで臭いわけだ。そんなことは屁でもない。

安倍——いえ、オナラ、屁ですけど？ それも「スーは音無くして、
臭い高し」のほうの屁です。

警官——違う。俺が訊きたいことは……安倍！ お前、朝からそこに
籠城^{ろうじょう}しているわけだから、アナお姉さんと仲よくなっただろ。

安倍——あつ、はい。色いろとお話をさせていただきました。アナお
姉さん、とても感じのいい方です。まだ独身で結婚願望もあありの
ようです。

警官——そうだなあ。あの声を聞けば、そんなことは想像できるっ
てこったあ。

安倍——ええつ。もしかしてお巡りさん、わたしに愛のキュービッド
になって欲しいとか？

警官——(慌てて、声がひっくり返る) 安安^{あなあ}安^あ倍！ さっき俺がした
話を忘れたのか!? 俺はもうすこし金を貯めるまでは女性には声も
指もかけない。(強面風に) 鋼鉄の男なんだぞ！

安倍——そうでしたね。すみません、忘れていました。

警官——俺が知りたいのはそんなことじゃない。

安倍——じゃあ何ですか？

警官——お前、アナお姉さんを裏で口説いて、自分の預金口座を操作
しただろ。きつと。

安倍——おっしゃっている意味が無限大の大きさで理解できませんが。

警官——よし。俺の推理を披露してやろう。たとえば、1万円引き
出したのに、通帳には1000円だけ引き出した印字がされるとか。
振り込まれる給料の桁を2桁多くするとか。どこかの誰から1億

円が振り込まれるとか。(笑) こんな操作をしたんだろ? ええ。

安倍 — 残念ですが、その推理、ぜんぶ、ぜんぶ、ありえません。お巡りさんの妄想です。「下手な考え休むに似たり」ですよ。

警官 — ふん。ことわざかあ。さつきは全問不正解だったのに。よく覚えていたな。まあいい。隠しても、後ではつきりすることだ、この場ではよしとしておこう。

安倍 — お巡りさん。そんなことより、早くここから出してください。もう3時間もここに閉じ込められています。次の現場へも急行したいです。きつと、短気な現場主任は顔を真っ赤にして怒っていると思います。娘たちにも会いたいです。

警官 — よし。それなら武器をこっちへ投げろ。

安倍 — ……?

警官 — どうした。武器を投げるんだ。

安倍 — そんなものは持ってません。たとえ持っていたとしてもこの状況ではそちらへ投げられませんよ。信じてください。

警官 — また信じてください、だと。「嘘は泥棒の始まり」って、ことわざを知っているよな?

安倍 — はい、よく、知ってます。嘘じゃないです。神仏に誓って、武器は持っていません。

警官 — (笑) へっへっへっ。安倍よ。お前も大卒だろ。間違ってるぞ。

安倍 — ええっ。何をですか? 武器は持ってませんから。

警官 — そこじゃない。「かみぶつ」じゃなくて、「しんぶつ」に誓って、って言うんだ。「しんぶつ」

安倍 — すみません。この歳になるまで「かみぶつ」って言ってききました。大いに反省します。ご教示ありがとうございます。感謝し

ます。

警官 — よし。それだけ素直ならいい。信じてやろう。いいか、最後の交渉だ。ゆつくりと忍び込んだ逆の方法で出てこい! 逆の方法で。簡単なことだろ?

安倍 — それができないのです。

警官 — なぜだ! 入れたんだろ?

安倍 — はい。入れました。

警官 — じゃあ、さっさと出てこい。

安倍 — ですから、ドアがオートロックされて内側からは開けられません。

警官 — オットーオットー、オートロックときたかあ。ううん。(現金の出し入れ口を覗き込んで) こんな小さな狭い溝みたいな所から、どうやって忍び込んだのだあ? まさか(銃を持つ右手を上げて、元氣よく) スモールライト! を使ったかあ。

安倍 — 違いますよ。そんなアニメじゃないですから。ありえません。横にあるドアから入ったのです。ドアです。

警官 — (ドアに目を向け) ♪ドアドアドア♪ ドアだあ?

まさか? (頭に「どこでもドア」が浮かぶ)

安倍 — 想像されていることよりも、もっと単純ですから。

警官 — じゃあ、(足で蹴る仕草) 足で、足で、こうドアを蹴り上げてみる。ロックが解除できるかしれん。

安倍 — いえ、足蹴りしても駄目なんです。入ったように簡単には出られないのです。ドアを壊すか、合鍵が必要です。

警官 — (ドアノブを回すが動かない) ううん。これって御足(現金)の自動出入機だろ?

N A こんなやりとりをして安倍一郎さんは解放、いやA T Mから出ることができました。3時間って短いようで長かったでしょうね。
ええっ？ 警察へ通報したのは、誰かって？ 何人かのお客さんに声をかけたけどどうまくいかなかったですよ。そのうち安倍さん（A）と警察官の松本さん（M）とを結びつけるご縁を作ったのはオレオレ詐欺に騙されかけていた鳥羽さん（T）だったのですよ。そうA T Mですから。

終わり。

